

歴史学分野**王権とモニュメント****メンバー**

- 上原真人（京都大学大学院文学研究科教授・リーダー）
鎌田元一（京都大学大学院文学研究科教授）
勝山清次（京都大学大学院文学研究科教授）
西山良平（京都大学大学院人間・環境学研究科教授）
吉川真司（京都大学大学院文学研究科助教授）
吉井秀夫（京都大学大学院文学研究科助教授）
根立研介（京都大学大学院文学研究科助教授）
山岸常人（京都大学大学院工学研究科助教授）
梶原義実（京都大学埋蔵文化財センター助手）
梶川敏夫（京都市埋蔵文化財調査センター）
山田邦和（花園大学文学部教授）
菱田哲郎（京都府立大学文学部助教授）
中町美香子（京都大学大学院文学研究科COE研究員）
岩井俊平（京都大学大学院文学研究科博士後期課程・研究会補佐員）

研究会の趣旨

自給的で完結していた小地域が異文化に触れ、世界観に180度の変換を迫られる。これを地域ごとの目、すなわち多元的人文学の見地から見たグローバル化と捉えれば、歴史的には、各時代、各地域にグローバル化があったことになる。特に王権の伸張が、広域的領土支配を生み出したときは、かつての小地域は予想もしなかったグローバル化の荒波にさらされることになる。その小地域の目を見た時、王権はモニュメントで象徴されることが多い。

王権は政治力・経済力、宗教的権威など各種の権力によって支えられる。そうした諸々の権力を、目に見える形で示した建造物がモニュメン

トである。しかし、モニュメントは単なる王権の象徴ではなく、モニュメントの造営がその権威を保証し再生産する機能をになう。それは王権の由来を語り確認する神話や儀礼が、王権を保証し再生産することに共通する。しかし、言語や所作は記録に留めない限り消滅する。これに対して、モニュメントは王の死後も存続し、機能が消失してもランドマークや遺跡として残ることが多い。また、モニュメントは時代、地域を問わず世界中に存在する。ピラミッド、神殿、モスク、古墳、廟、寺院、教会、宮殿、城郭、競技場、議事堂、石碑、凱旋門などがそれに該当する。本プロジェクトは、そうしたモニュメントと王権との関係を、文献・建築・考古などの諸分野を総合し、時間的、空間的な広がりの中で、その共通性と相違点を具体的に解明することを目的とする。

本プロジェクトでは、当面、2つの方向から王権とモニュメントとの関係を検討していくことにしたい。まず第1に、世界諸地域における王権とモニュメントの様相の比較検討を行なう。具体的には、研究分担者およびゲスト・スピーカーが専攻する時期・地域におけるモニュメントの特徴と王権との関係について研究会で発表し、議論を進めることにより、モニュメントの地域性と普遍性について検討を進める。

第2に、フィールド・ワークを中心とした具体的な調査研究を通して、特定地域におけるモニュメントの諸様相を明らかにする。当面は、日本および朝鮮半島の古代都城とその周辺のモニュメントを研究対象とする。

活動状況

1. 安祥寺の調査研究

安祥寺は、嘉祥元(848)年に文徳天皇の母・藤原順子(809-871)の発願により創建された寺で、入唐僧恵運(798-869)が開基となっている。貞観9(867)年に恵運が作成した『安祥寺伽藍縁起資財帳』によれば、平安時代の安祥寺は醍醐寺と同様に、山上伽藍=上寺と山下伽藍=下寺とから成り、上寺には礼仏堂と五大堂とからなる堂院、東西僧房、庫裏、浴室などの施設があった。また下寺には約2万m²の寺域内に仏堂・僧坊・門楼などがあったようである。安置されていた仏像は現存す

る五智如来像・五大虚空蔵菩薩像を含めて31体にも及び、多くの仏画・仏具・経典に加えて広大な寺領をも保有していた。

このように、安祥寺は文献・美術・建築・考古といった様々な側面から研究する必要があり、それによって単独分野からのアプローチだけではなしえなかった総合的な研究が可能である。本研究会では、現在この安祥寺についての研究を継続的に行っている。以下にその概要を記していく。

安祥寺上寺の測量調査

2002年12月20日～24日、2003年1月11日～19日の2回にわたって、安祥寺上寺の測量調査を実施した。京都大学、花園大学、京都府立大学、京都女子大学の教官・学生が参加した大規模な調査で、上寺の全域をカバーする25cm等高線の測量図を作成した。

今回の調査によって、寺域北西に方三間の建物が存在することが新たに判明し、同時に主要伽藍のある平坦地の東側山腹に存在する平坦地についてもその規模や形状を明らかにすることができた。完成した測量図は、今後、安祥寺に関する調査研究を進める上での基礎資料となるものである。

第1回研究会

2003年2月18日に、第1回研究会が行われた。京都市埋蔵文化財調査センターの梶川敏夫氏によって安祥寺上寺測量調査の結果が報告された。以下はその概要である。

安祥寺上寺測量調査の成果について

梶川敏夫（京都市埋蔵文化財調査センター）

1. 礼仏堂跡

基壇跡規模は、現状で東西21m・南北15m前後あり、基壇外側の化粧等は不明である。基壇上面には東西約10m・南北約7mのやや高まった部分があって、その周辺に沿って自然石が散在している。これは須弥壇の痕跡ではないかと考えられる。

基壇上では礎石・根石などが確認できず、建物の平面規模は不明であ

るが、北方の五大堂の柱間寸法(10尺又は9尺)を参考に、仮に桁・梁を10尺等間で復元すると、最大で東西7間・南北4間又は5間程度の建物と考えられる。

2. 礼仏堂跡西側雨落溝跡

長さ南北約10mを確認した。幅は0.6～0.7m、深さ15～20cm程度とみられ、地表観察から溝内に石が転落しているのが確認できる。なお、北及び東側の雨落溝は明確には石が確認できず、位置確定はできなかった。南辺は雨落溝の存在そのものが不明である。

3. 東僧房跡と軒廊

基壇は南に段差がある以外は確認できないが、僧房跡の南端と北端の礎石を確認したことから、東西2間・南北6間の建物と判明した。軒廊は、南面の礎石1カ所を確認したが、礼仏堂の基壇南端にみられる翼状の張り出しとは位置があわない。

4. 西僧房跡と軒廊

南・西・北の一部で基壇の高まりを残し、南北中央列以外は大半の礎石を確認した。建物規模は東西2間・南北6間で、東僧房と同じ構造の建物と判明した。軒廊の礎石も確認されたが、東僧房と同様に、礼仏堂の基壇南側張り出しとは位置があわない。

5. 五大堂跡

元位置で礎石を8カ所確認し、建物規模は東西5間・南北4間とみられる。現在、基壇の東側が土で埋もれている状態であるが、これは、伽藍の背後から東へ落ちる谷筋から豪雨などによって土砂があふれて堆積したものと考えられる。この谷筋は、当初境内へ侵入する雨水や土砂を防ぐ水切り溝であったのが、時間の経過とともに浸食が進み、五大堂基壇の東北隅まで浸食したものであろう。

6. 方形堂跡

五大堂跡から西北西約11mのところにある建物跡で、今回の調査によって新たに発見された。

この建物跡の明確な基壇は地表からは確認できないが、礎石のボーリング調査などによって方三間の建物であることが判明した。背後の山腹斜面がずり落ちて、北西から南東にかけての半分以上が埋没している。建物の性格は不明であるが、塔・宝蔵・多宝塔・法華堂・常行堂などのほか、『資財帳』に記載されている「大宜所」?などが考えられる。

7. 東側山腹平坦地

繁茂した笹などを伐採した結果、主要伽藍から東へ10m下がった場所にて、南北に細長い平坦地が存在することが明らかとなった。現在は西側が埋まり東側（谷側）が削られた東下がり地形になっており、幅5～7m、南北75mほどの規模である。中央やや南方で石を一個発見したが、元位置を動いているとみられる。他に建物跡を示す礎石らしきものを発見できなかったことから、この石は上方の主要伽藍の礎石が転落したものである可能性がある。

平坦地南端は通路状に狭くなり、そこから南東へ一段下がったところに小規模な平坦地（8×3m程度）がある。また、この小規模平坦地の西側（主要伽藍東僧房跡の南南東）には、山腹平坦地と主要伽藍を結ぶ通路と考えられるスロープ状の地形を確認した。

これらの成果を踏まえ、今後は表採遺物や写真の整理などを行っていく予定である。

第2回研究会

2003年4月19日に、第2回研究会が行われた。山科区で現在も法灯を継いでいる安祥寺を、ご住職のご厚意によって調査することができた。以下はその概要である。

安祥寺下寺境内の諸施設とその概要

1. 観音堂

観音堂と呼ばれる建物の中に、十一面観音像・四天王像が安置されている。美術史の根立助教授によれば、十一面観音像はかなり多くの補修

を受けているため判断は難しいが、一木造りの技法で造られたもので、製作時期は平安時代まで遡る可能性もありそうである。また、四天王像については、一部の像が安祥寺創建時に遡る可能性もありそうである。いずれにしてもX線撮影を含めた詳細な調査が必要であり、機会を改めて観音堂の建築と合わせた本格的な再調査を行うことになった。

また、この十一面観音像が安置されている須弥壇の下からは、棟札が発見され、「文化」の紀年があることが判明した。

2. 青龍社

青龍社は、安祥寺境内にある社であり、現在京都国立博物館に展示されている蟠竜石柱がかつては本尊として祀られていた。ここでも、中からいくつかの棟札が発見された。「享保十七年」の文字が明瞭に見取れるものもあった。これは、内容から現青龍社の前身建物の棟札であるらしい。他にも現在の社殿にかかわる「嘉永」の年号を有する棟札があり、安祥寺の歴史を考察する上で貴重な資料となる。

3. 地藏堂

地藏堂の建物は、安永年間に建てられたものだといい、その天井には美しい植物の絵が今もはっきりと残っている。安置されている地藏菩薩像は鎌倉期に遡る可能性があり、これも再調査が必要である。

4. 大師堂

大師堂は開山堂とも呼ばれ、弘法大師像を中心として、ほかに4人の安祥寺にかかわる高僧像が祀ってある。安祥寺開山の恵運の像については、表面彩色の剥落が著しいのが惜しまれる。

以上のように、安祥寺下寺には建築・美術にかかわる多くの貴重な資料が存在する。これらを詳しく再調査することによって、安祥寺の歴史のこれまで知られていなかった部分が明らかになると考えられる。上寺跡の考古学的調査とあわせて、ひとつの寺院が当時の権力といかにかかわり、どのような歴史を辿ったのか、通時的に研究することが可能となるのである。

第3回研究会

2003年5月13日に、第3回研究会が行われた。本学日本史学研究室の鎌田元一教授、COE研究員の中町美香子氏による安祥寺資財帳の校訂・釈読の検討が報告された。以下はその概要である。

安祥寺資財帳を読む

鎌田元一（京都大学大学院教授）

中町美香子（京都大学大学院日本史学研究室）

本研究会が現在進めている山科安祥寺の調査・研究に関し、文献面での根本史料となる「安祥寺資財帳」について、校訂・釈読などの基礎的検討を行なった。

安祥寺資財帳は、同寺の開基恵運が貞観九年（867）みずから勸録し、同十三年、本願藤原順子の死去の直前、その太皇太后宮職から、以後の公験たるべく職印を捺して同寺に下されたものである。その後の伝来の詳細は不明であるが、保延二年（1136）十月、勸修寺宝蔵の梁上において「数十年来、人不知之間、湿損雨露、多失文字」という状態で発見され、それを新たに写して一本を作成せしめたものが勸修寺に伝えられた。その勸修寺本を至徳二年（1385）七月、さらに書写した一本が近年まで東寺観智院に伝来したが、残念ながらその後流出し、現在ではこの古写本の所在は不明である。しかし幸いなことに文政二年（1819）塙保己一のもとでこの観智院本を書写した一本が現存しており、これが今日所在の知られる唯一の写本となっている。

このような状況下に、今日まで活字本としては『続群書類従』所収本、『大日本仏教全書』所収本、『平安遺文』所収本などが刊行されているが、相互に文字の異同も多く、またその句読・釈読にも問題が多い。報告は時間の関係上、冒頭の縁起部分についてのみであるが、諸活字本および一部写真の知られる観智院本の対校の結果を示し、また釈読試案を示して、新たに現存文政写本の調査を基とし、関連史料との総合的検討をも踏まえた、より厳密な校訂本作成の必要性を明らかにした。現在その作業に取り組んでいる。

第4回研究会

2003年6月10日に、第4回研究会が行われた。立命館大学文学部助教授の高正龍氏による、安祥寺下寺推定地付近で発見された古墓の発掘調査報告と、本学日本史学研究室の吉川真司助教授による、安祥寺成立直前の山科盆地に関する文献学的検討が報告された。以下はその概要である。

安朱古墓の発掘調査

高正龍 (立命館大学文学部助教授)

本発表は、1993年に発掘された平安時代前期古墓(9世紀後葉)の調査報告である。安朱古墓は現在の京阪山科駅南側に所在し、安祥寺下寺推定地として調査が行われた。また、国内では類例が非常に少ない木炭木槨という構造を持っていることでも知られている。以下、この古墓の構造を紹介する。

まず東西約3.4m、南北約2.0m、深さ約0.4mの墓壇を掘り、その底に炭を敷いている。その上に遺体を収めた木棺と、それを覆う木槨(内槨)を置き、そのまわりに木炭をめぐらせている。ここから、従来の木炭墓・木炭槨墓とは異なる「木炭木槨墓」という呼称を用いたのである。さらに木炭の外側にも埋め土がみられることから、もうひとつ槨(外槨)が存在した可能性もある。御所市所在の巨勢山古墳群で発見された巨勢山室古墓(9世紀前半)のように、こうした木炭木槨墓の類例が知られるようになっており、かつて「木棺の周囲を木炭で充填した」と紹介されている山科区の西野山古墓なども、この木炭木槨墓の可能性が高いだろう。

出土した鉄釘の配置から、木棺は長さ約195cm、幅45～50cmと考えられ、長側板と小口板に底板側から釘を打ち付けている。また小口板は、長側板で挟んで釘で固定されていたと考えられる。槨の下部には南北方向に2対4本、東西方向に1対2本の横木が渡されていたことが、出土した釘から想定される。

内槨は東西約235cm、南北約105cmで、外槨は東西約265cm、南北約

145cmを測るが、その構造は不明な点が多く、木棺のように板の組み方などを復元することはできない。木炭槨は、この内槨と外槨の間に木炭及び土を充填して作られている。

出土遺物としては、銅鏡片、乾漆製品、銅銭（富寿神寶・818年初鑄）、土師器などが挙げられる。銅鏡は蛍光X線分析によって中国産の銅と組成が近いことから、舶載品の可能性が高い。また、この鏡と重なるようにして出土した乾漆製品は、鏡箱として使用されたものかもしれない。土師器は、椀・杯・皿が合わせて9点出土しており、9世紀後葉に編年される資料である。古墓の年代は、この土師器を基準として割り出している。なお、これらの遺物は、その出土位置から推定して槨の上に置かれたものと考えられる。

この古墓が安祥寺下寺の寺域内、もしくはそれに非常に近い場所にあることから、被葬者は安祥寺に深い関係を持つ人物と考えられる。また、『続日本後紀』では、嵯峨上皇の喪葬に関して「重以棺槨、繞以松炭」という記載がみられ、同じ構造を持つこの古墓が身分の高い人物の墓であることも推定できる。中国製とみられる鏡の存在もあり、安祥寺に深い関係を持つ高位の人物として、藤原順子の墓である可能性も考えられるのではないだろうか。

安祥寺以前 - 山階寺に関する試論 -

吉川真司（京都大学大学院助教授）

7～9世紀における山科盆地北部の地域史を考え、安祥寺成立の歴史的前提を明らかにする目的で報告を行なった。文献史学の方法に徹しながら、特に11～12世紀の史料を遡源的に活用する方途をさぐった。得られた成果はおおむね以下のごとくである。

- 一、七世紀中後期は、山科盆地が比較的注目された時期であった。大化改新以後、逢坂が畿内北限とされ、盆地東辺を北陸道が貫通し、さらに宇治橋までが大津京の近郊域となっただけで、この時期に注目されるモニュメントとしては、盆地北端に造営された天智天

皇陵と、興福寺の前身寺院山階寺があげられる。山階寺の創建については伝承的部分が多く、その位置をめぐる大宅説・中臣遺跡説・盆地北部説などが提唱されているが、いまだ通説となるような論考は現われていない。

二、山階寺の位置をさぐる際には、かつて坪井清足がそうしたように、貞観9年(867)「安祥寺資財帳」を利用することができる。安祥寺下寺の四至に「南限興福寺地」という記載があり、山階寺の故地を示している可能性があるからである。そこでまず、同資財帳および保元3年(1158)「安祥寺領寺辺田畠在家検注帳案」によって安祥寺の四至と寺辺所領を復原すると、下寺は現在の安朱地区を中心に、石雲北里・大槻北里・陶田北里(天智陵まで)にあり、上寺はそれに北接する山林に立地していたと推定され、さらに寺辺所領についても両史料を整合的に解釈して、分布域をつかむことができた。これによって、「興福寺地」は大槻里北半～陶田里にあったと推断するに至った。

三、この「興福寺地」は、興福寺の史料に山城国宇治荘として現われる所領に該当すると考えられる。承安3年(1173)「興福寺維摩会不足米勘文」から、宇治荘が維摩会料所であったこと、それが藤原鎌足の功田百町に由来するらしいことが知られ、また「不沽田」という特別な扱いをされている宇治荘・草和良宜村は、ともに鎌足邸第(山階第と三島別業)の故地と考えることができる。大宅の「興福寺橋」をどう処理するかという問題は残るが、山階第・山階寺は上述したような位置にあったと考えるのが自然である。

以上のように論じたのち、山階第・天智陵がこの場所に置かれた理由をどのように考えるか、また田辺史氏(上毛野朝臣氏)がこの地で継続的に勢力を保ったことをいかに意義づけるか、といった点を課題として提示し、報告を終えた。

第5回研究会

2003年7月8日に、第5回研究会が行われた。本学美学・美術史学研究

室の根立研介助教授による、安祥寺伝来の仏像に関する考察が報告された。以下はその概要である。

安祥寺伝来の仏像をめぐって

根立研介（京都大学大学院助教授）

安祥寺に伝来した仏像の中で特に著名なものは、現在、東寺観智院に所在する木造五大虚空蔵菩薩像と、明治以来京都国立博物館に陳列されている五智如来像である。前者は、安祥寺の開基恵運が長安から請来したという伝承に基づき、晩唐期を代表する木彫像として高い評価が与えられてきた。一方、後者については、安祥寺創建期に当たる9世紀半ばの基準的な資料として取り扱われ、また五智如来像の現存最古の一具像としても注目されてきた。今回の発表は、この2件の彫像に関する近年の研究動向を報告するとともに、その問題の所在を明らかにすることを試みた。

まず、五大虚空蔵菩薩像については、その伝来がかなり揺らいできていることを指摘した。この群像については、永和2年（1376）に観智院に移座されたことが観智院聖教文書中の「賢宝法印記」や法界虚空蔵菩薩台座銘などから知られるが、それ以前の伝来については実は曖昧なところがあり、幾つかの問題が存在している。一つは、かつて安祥寺に所在していたものであるとしてもその安置堂宇がどこなのか、また幾度か安置堂宇が変わっていないのか検討する必要がある点である。そして、本群像の伝来に関して何よりも問題になってくるのが、元禄16年（1703）の台座銘に記されている恵運の長安から請来の伝承である。長安周辺で造られたことが明確な晩唐期の木彫像は確認されておらず、またこれに似た石彫像も知られていない。この群像の制作環境を考えるためには、視野を江南地方辺りまで広げていく必要が既に指摘されている。この群像を従来のように晩唐期を代表する木彫像として取り扱うことはかなり疑問であり、改めて制作年代や制作地の問題を検討する事は必要であろう。

次に五智如来像に関しては、像の厳密な制作年代、あるいは当初の安

置場所の解明が彫刻史研究の大きな課題となっており、第二次世界大戦以前から近年に至るまで議論が重ねられてきている。その議論の基となるのが、「安祥寺伽藍縁起資財帳」と『日本三代実録』の記述であるが、これらの史料により、五智如来像が安祥寺の創建期の何時造られ、上寺あるいは下寺のどの堂宇に当初安置されたかが議論されてきた。ここでは、まず最初に近年の主要な論考5編の概要を紹介し、議論の精度が増してきたが、決定的な結論に至っていない現状に触れた。この問題の解明については、本研究会の今後の活動に期待を託すことにし、最後にこの五智如来像の造像工房の問題に触れた。本群像の制作工房については、従来真言宗教団との関わりで論じられてきたが、類似の作風、あるいは技法を持つ像が必ずしも真言宗関係の造像に限らないことなどを考慮すれば、律令制の解体と共に衰退が想定されてきた官営工房についても、改めて注目する必要があることなどを指摘した。

以上が、本研究会による安祥寺の調査研究にかかわる活動の経過である。

2. 基礎資料集の作成

モニュメントは建造物の形をとることが多いので、建築史関係資料の収集と検討が不可欠である。本研究会では、これまで公表されていなかった資料を整理し、随時刊行していく予定である。

『京都大学所蔵古瓦図録 (山野道三コレクション)』の刊行

資料集の1冊目として、2003年3月に『京都大学所蔵古瓦図録 (山野道三コレクション)』を刊行した。本書は、京都大学の考古学研究室が所蔵する瓦コレクションの図録である。資料は、1920年に京都大学法学部を卒業した山野道三氏が各地で収集したコレクションであり、1970年に山野氏のご令嬢・川田禎子氏より本学に寄贈された。

本書は、全部で300点近い瓦の実測図・拓本・写真を掲載し、巻末には各個体の観察表を付載している。奈良県・大阪府などで採集した瓦が中心となっているが、一部朝鮮半島の資料も含まれている。なかでも、奈良県下採集と考えられる資料群は数もまとまっており、学術的価値は

高い。時代は日本ではじめて瓦が用いられた飛鳥時代のものから、中世にまで及んでいる。ほかにも、瓦当部完形の軒瓦、刻印を持つ平瓦など貴重な資料が多く、本図録の刊行によってこれらの基礎資料の利用が可能となった。

今後の活動

今後、本研究会においては、月1回の研究会活動および京都大学所蔵品をはじめとする「王権とモニュメント関連資料」の整理・調査研究を継続するとともに、その成果として、以下のような出版物の刊行を予定している。

1. 『安祥寺の研究』の刊行

これまでの安祥寺にかかわる研究会の活動を総括し、『安祥寺の研究』として出版する。本書には、本研究会が行った安祥寺上寺測量調査の報告、会員各氏が研究会において発表した内容を、論考として掲載する予定である。

2. 『京都大学所蔵古瓦図録』の刊行

基礎資料集作成のために、現在天沼俊一資料の整理を継続して行っている。天沼俊一資料は、京都大学工学研究科が所蔵する日本建築史にかかわる基礎資料である。中でも古瓦資料は膨大で、その一部は『家蔵瓦譜』として天沼俊一自身が公刊している。本研究会ではこの瓦資料全てを整理し、『京都大学所蔵古瓦図録』として出版する予定である。現在のところ、2004年度刊行を目指して、コンテナ140箱に及ぶ瓦資料の写真撮影・実測・採拓を進めている。